

平成26年度・冬季企画展

北陸最大級の横山古墳群

— 神奈備山古墳とその系譜 —

あわら市郷土歴史資料館
〈一般展示室 企画展示ケース〉

横山古墳群は 300 余基を数えるとされる古墳総数はもとより、前方後円墳が多数含まれることで、注目されてきました。その中で数少ない発掘調査例であり、かつ越前最後の大首長墓と目される神奈備山古墳の出土品を中心に、先代の大首長墓とされる腕貸山古墳などの他の横山古墳群中の古墳からの採集品に加えて、比較資料として更に前代の大首長墓である永平寺町二本松山古墳出土の埴輪も交えて、その系譜の一端に迫ろうとするものです。

今回の展示を通して、横山古墳群に対しより一層理解が深まることで、その保存・活用の一助となれば幸いです。

【越前の大首長墓の系譜】

福井県北部にあたる越前における大首長墓の系譜は、中司照世氏によって編年が行われ、4 世紀中葉から 6 世紀中葉の 9 代に亘るとされ、その造営地域は、永平寺町（旧松岡町境）・坂井市丸岡町、福井市北西部、永平寺町（旧松岡町）、あわら市（旧金津町・丸岡町境）へと変遷しています。

最初の大首長墓と目される手繰ヶ城山古墳は 4 世紀中葉頃に旧永平寺町と旧松岡町境の志比境の標高 164.3m の山頂に、これまでとは隔離した規模で築かれた全長 129m の前方後円墳です。

続く 2 代目・3 代目の六呂瀬山 1・3 号墳は九頭竜川対岸の丸岡町上久米田の標高約 196m の山頂に相次いで接するように築造され、その規模は 4 世紀末頃の 1 号墳で全長 140m と越前最大となりますが、4 世紀末～5 世紀初頭頃の 3 号墳は全長 90m と既に縮小化が始まっており、近畿地方などで 5 世紀代に古墳の規模が最大となるのとは様相を異にします。

また、4 代目の免鳥長山古墳は、突如、日本海を望むことのできる福井市北西部の海岸線付近に 5 世紀初頭頃に出現した特異な造り出しを 2 箇所にもつ帆立貝形を呈する全長 91m の古墳で、低位丘陵頂部に立地し、これまでと地域はもとより墳形・立地の面でも大きく変化しています。

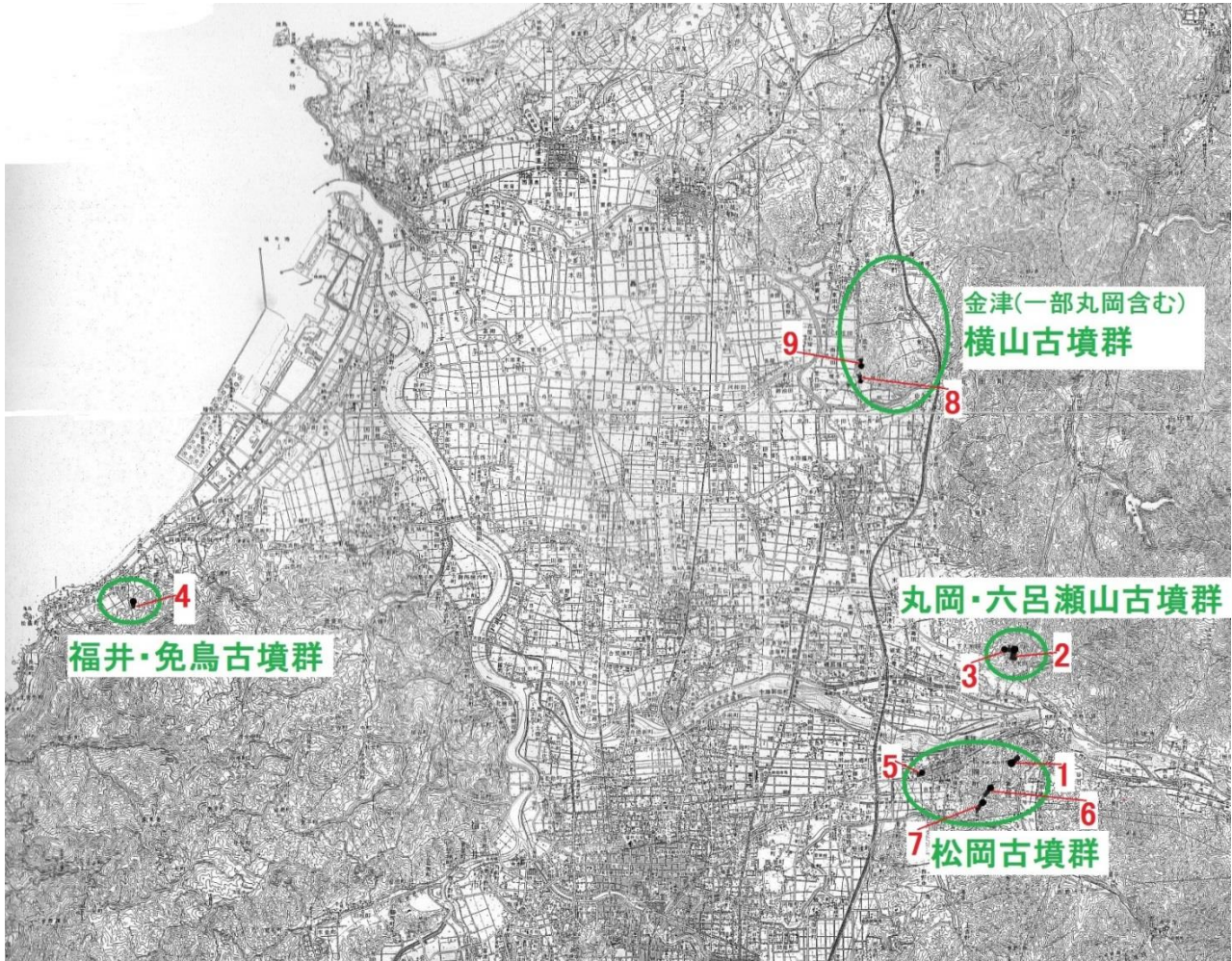
5 代目の泰遠寺山古墳は、削平を受けて現存しませんが、九頭竜川流域の旧松岡地域に戻り、初めて平地に築かれた 5 世紀中葉頃の全長 64m の帆立貝形古墳です。

6 代目の石舟山古墳は、全長 79m の前方後円墳ですが、泰遠寺山古墳と同地域、ほぼ同時期ながらもこれまでよりも更に高所の標高 257.8m の山頂に築造されています。続く 7 代目の二本松山古墳も、最高地点の標高 273.1m の山頂に築かれた 5 世紀末頃の全長 89m の前方後円墳です。

これら初代から 7 代までの大首長墓のうち、手繰ヶ城山古墳と六呂瀬山古墳を除く 5 基は、埋葬施設として福井市の足羽山周辺で産出する緑色凝灰岩である笏谷石製と思われる舟形石棺（六

呂瀨山 1 号墳は破片のため形状不明) が納められているのが大きな特色です。当時それぞれ 1 トン以上もある棺身と蓋の両方を標高 160m~273.1mの山頂まで運んだ労力たるや、大変なものであったことが想定されます。特に最高所にある二本松山古墳には舟形石棺が 2 基あるようです。

この後、越前の大首長墓は地域を移し、坂井市丸岡町とあわら市の境に位置する横山古墳群中の 8 代目の 6 世紀初頭頃の椀貸山古墳、9 代目で 6 世紀中葉頃の神奈備山古墳へと継承されましたが、埋葬施設は舟形石棺から石屋形を備えた横穴式石室へと変化して終焉を迎えました。



越前の歴代大首長墓の位置図 (図中の番号は下表と連動)

地域	古墳名	墳形	全長	外部設備	埋葬設備	副葬品等	築造時期
1 松岡	てくりがじょうやま 手繰ヶ城山古墳	前方 後円	129m	ふきいし はにわ 2段・葦石・埴輪	未詳	未詳	4世紀中葉
2 丸岡	ちくろせやま 六呂瀨山1号墳	前方 後円	140m	2段・葦石・埴輪	せつかんへん 石棺片	未詳	4世紀末
3 丸岡	ちくろせやま 六呂瀨山3号墳	前方 後円	90m	2段・葦石 ・埴輪	未詳	未詳	4世紀末~ 5世紀初頭
4 福井 北西	めんどりながやま 免鳥長山古墳	ほたて 帆立 貝	91m	2段・葦石 ・埴輪	ふながたせつかん 舟形石棺	かんとう くわがたいし しやりんせき まがたま 石製環頭、鍬形石、車輪石、勾玉、 管玉、鉄刀など	5世紀初頭
5 松岡	たいおんじやま 泰遠寺山古墳	帆立 貝	64m	しゅうごう 周濠・2段 ・埴輪	舟形石棺	鏡2面、勾玉、管玉、粟玉、トンボ玉、 丸玉、小玉	5世紀中葉
6 松岡	いしふなやま 石舟山古墳	前方 後円	79m	2段・埴輪	舟形石棺	かっちゅう 甲冑片、須恵器片	5世紀中葉
7 松岡	にほんまつやま 二本松山古墳	前方 後円	89m	2段・埴輪	舟形石棺2	(1号石棺) 勾玉、甲冑片 (2号石棺) 鏡1、鍍金冠、鍍銀冠、 管玉、鉄剣、鉄刀、眉庇付冑、短甲など	5世紀末
8 丸岡 (金津境)	わんかしやま 椀貸山古墳	前方 後円	45m	周濠・2段・ 葦石・埴輪	横穴式石室 ・石屋形	須恵器片	6世紀初頭
9 金津	かなびやま 神奈備山古墳	前方 後円	60m	きだいぶ 基台部・2段 ・葦石	よこあなしせきむつ 横穴式石室 ・石屋形	鏡片、銀環、小玉、鉄刀、鉄刀子、 鉄鍬、挂甲、轡、鞍金具、須恵器など	6世紀中葉

表 越前の歴代大首長墓一覧

二本松山古墳

永平寺町の九頭竜川を望む二本松山丘陵の山頂に位置し、その頂上には 273.10mの三角点があります。江戸時代の享保年間（1716～）の盗掘時に石棺の中から副葬品が持ち出されて売却されたことが記録に残されています。この石棺（第1号石棺）が明治13年（1880）に再発掘された際の略測図が残されていますが、舟形石棺で、石棺の大きさは縄掛突起を除き、長さ287.7cm、同幅115.5cmと考えられています。現在、副葬品は勾玉1個が残存するのみです。

明治39年（1906）、陸軍測量部が山頂に三角点を設置した際、別の石棺（第2号石棺）が発見され、宮内省歴史部主任の高橋健自氏により調査が実施されました。舟形石棺で縄掛突起を除いて、長さ192.4cm、同幅76.4cmと第1号石棺よりもかなり小さなものです。副葬品として、鏡1、鍍金冠1、鍍銀冠1、管玉4、鉄剣1、鉄刀3、鹿角製刀装具13、鍍金具2が出土しています。

平成14・15年度に旧松岡町教育委員会により、測量調査、発掘調査が実施されました。それによると、全長89.0m、後円部径50.5m、前方部長38.5m、前方部幅26.0m、後円部高8.9m、前方部高4.7mを測る2段築成の前方後円墳とのことです。

外部施設としては、埴輪を有しており、埴丘裾部や段築間の平坦面で埴輪列も検出されています。展示している円筒埴輪2点と朝顔形埴輪1点は、発掘調査のトレンチ内から横倒しの状態などで出土したものを復元したものです。朝顔形埴輪は接合しますが、離れたまま展示しています。

また、前方部東側に従属する古墳と思われる陪塚、及び造り出し部も確認されています。

これらから、二本松山古墳は、同じ松岡古墳群中にある5世紀中葉頃の石舟山古墳に続いて造られた5世紀末頃の越前の大首長墓と思われます。

<展示品>

・二本松山古墳（永平寺町教育委員会所蔵）

えんとうはにわ
円筒埴輪 2（展番1・2）

あさがおがたはにわ
朝顔形埴輪 1（展番3）



二本松山古墳出土朝顔形埴輪・円筒埴輪

【横山古墳群とは】

坂井平野北東部のあわら市中川から瓜生を経て、一部が坂井市坪江地係にまでまたがる、国道8号線に面した通称「横山」の丘陵上にあります。数基は平地にありましたが、現存するのは椀貸山古墳のみです。古墳の分布は丘陵頂部から坂井平野や竹田川に面した西側に偏在しています。

1920年の上田三平氏による『福井県史蹟勝地報告』第1冊では、越前では珍しく平地に立地している椀貸山古墳を初め、多数の古墳がこの付近に分布していることを既に報告しています。

次いで斎藤優氏が、前方後円墳14基、円墳100基余からなる大古墳群であることを紹介し、1955

かになびやまこふん
年に神奈備山古墳、1956・57年に2、3基の円墳を発掘した成果を1971年の「横山古墳群」『文化財調査報告』第21集で報告されたことにより、前方後円墳を多数含む北陸有数の古墳群であると知られるようになりました。

その後、福井県教育委員会により、1977年には神奈備山古墳の緊急確認調査が実施され、その成果と共に、横山古墳群が方墳・円墳・前方後円墳など総数233基余りからなる北陸最大級の古墳群であることが1978年の『重要遺跡緊急確認調査報告』Iで報告されました。

長年、現地踏査や研究をされてきた中司照世氏

が2001年に「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』第8号に発表した論文により、現在の古墳総数は301基以上、うち前方後円墳は18基となっています。既に消滅しているものも含めると、元々は310基前後あったと推定されており、古墳の分布状況により、南部・中央部・北部の3群に分け、それぞれ、「坪江支群」「瓜生支群」「中川支群」と呼ぶことを提唱されています。

坪江支群中の椀貸山古墳と神奈備山古墳は、それぞれが築造された時代、横山古墳群中は元より、越前の他の地域の古墳と比較しても規模や外部施設、内部施設等が優れていることから、2代に渡る越前の大首長墓と考えられています。そのため、継体天皇と関連させて語られることも多く、椀貸山古墳については、継体天皇の皇子の「椀子皇子」の墓との伝承も地元には残されています。

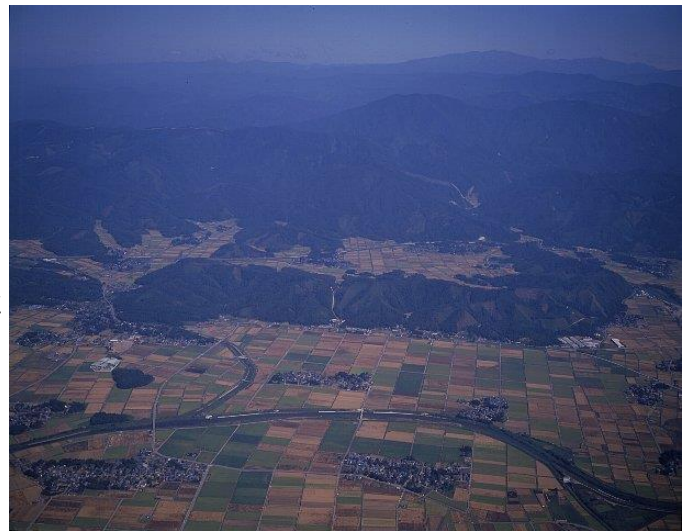
椀貸山古墳

越前で最初に発見された前方後円墳で上田三平氏によって周濠を有する古墳として紹介され、その後、横穴式石室をもち、石室内に石屋形があることが明らかにされています。

この古墳は、坂井市丸岡町坪江にある前方部を北北西に向けた前方後円墳で、標高約16mの山麓部の平地に立地します。越前では、幅12m余の馬蹄形の周濠をもつことが確実な唯一の古墳です。しかし、周濠は工場敷地として完全に埋め立てられ、石室も現在は埋め戻されています。墳丘は、2段築成とされ、ほとんど盛土によって造られたと考えられています。墳丘斜面に円礫の葺石が施されていたと考えられており、埴輪片も採集されています。現状の古墳の規模は全長42m、後円部径28.2m、同高5.7m、前方部長21m、同幅24.3mを測ります。

埋葬施設は、後円部中央からくびれ部に向かって開口する片袖式の横穴式石室で、奥壁に沿って左右の立柱状の石に屋根となる石材を載せた石屋形があり、その石材には赤色顔料が塗布されていたようです。かつて石室の天井石が落下した際、石室内から須恵器片が採集されています。

永平寺町の5世紀末の二本松山古墳に続いて築造された6世紀前葉頃の越前の大首長墓とされ、これ以前とは造営地域が大きく異なることから、継体天皇との関わりでよく論じられます。



横山古墳群周辺の航空写真（西方より）

（福井県教育委員会画像提供）

<展示品>

・ 椀貸山古墳 (福井県教育委員会所蔵)

須恵器片 6 (器台片)・(展番 14)



坪江 2 号墳

椀貸山古墳同様、坂井市丸岡町坪江の山麓の平地にありました。上田三平氏の 1920 年の報告によると、椀貸山古墳の北東約 30.6m にあり、全長 26.1m、高さ 3m を測る前方後円墳で、後円頂部に石室の一端の大石が露出し、その立地から椀貸山古墳の陪塚であろうと紹介されました。

造成や埋め立てにより消滅していますが、椀貸山古墳の前方部端からほど近く、主軸をほぼ同じくする前方後円墳であることから、やはり陪塚と考えられており、椀貸山 2 号墳とも呼ばれます。

また、工場建屋の増築に伴い、丸岡町教育委員会が確認調査を実施した際、周濠が確認され、埴輪も検出されていますが、段築や葺石の存在は未確認で、存在しなかった可能性が高そうです。

後円部にあった石室が破壊された際に、その中から須恵器 (器台・長頸壺 (展番 5・8)・高坏 (展番 7) など約 40 個体) と土師器 (壺 (展番 9)、金銅製の杏葉や木心鉄板張輪鍔 (展番 13) などの馬具、鉄刀などの武器が発見されており、椀貸山古墳とほぼ同じ時期、6 世紀前葉頃に築造されたものと思われます。

<展示品>

・ 坪江 2 号墳 (福井県立歴史博物館所蔵)

馬具片 4 (木心鉄板張輪鍔 1 (展番 13)、
他 3 点 (展番 11、12))
須恵器 4 (長頸壺 2 (展番 5、8)、
短頸壺 1 (展番 6)、高坏 1 (展番 7))
土師器 2 (長頸壺 1 (展番 9)、椀 1 (展番 10))



坪江 2 号墳出土土器類

中川 65 号墳

横山古墳群の中川支群中の低丘陵上の尾根上 (標高約 49m) に立地する前方後円墳で、中川奥 1 号墳とも呼ばれます。古墳の規模は全長 47m、後円部径 29m、同高 7m、くびれ部幅 13m、前方部長 24m、同幅 41m、同高 6.7m を測り、前方部先端をほぼ西側に向けています。

墳丘は、2 段築成で、墳丘上に礫が存在することから、葺石が施されていたと考えられています。また、段築面のテラスからは、須恵質と土師質の埴輪が検出されており、期間限定で展示している円筒埴輪 (展番 4) は後円部北側中段から採集された須恵質のものを復元したものです。

なお、前方部先端南側から西に伸びる尾根には、65 号墳の陪塚と考えられる 1 辺 11m、高 2m

の方墳の中川 64 号墳が存在し、埴輪片も採集されています。

<展示品>

- ・中川 65 号墳 (福井県立歴史博物館所蔵)

えんとうはにわ
円筒埴輪 1 (展番 4)

*平成 27 年 2 月 15 日 (日) までの期間限定展示

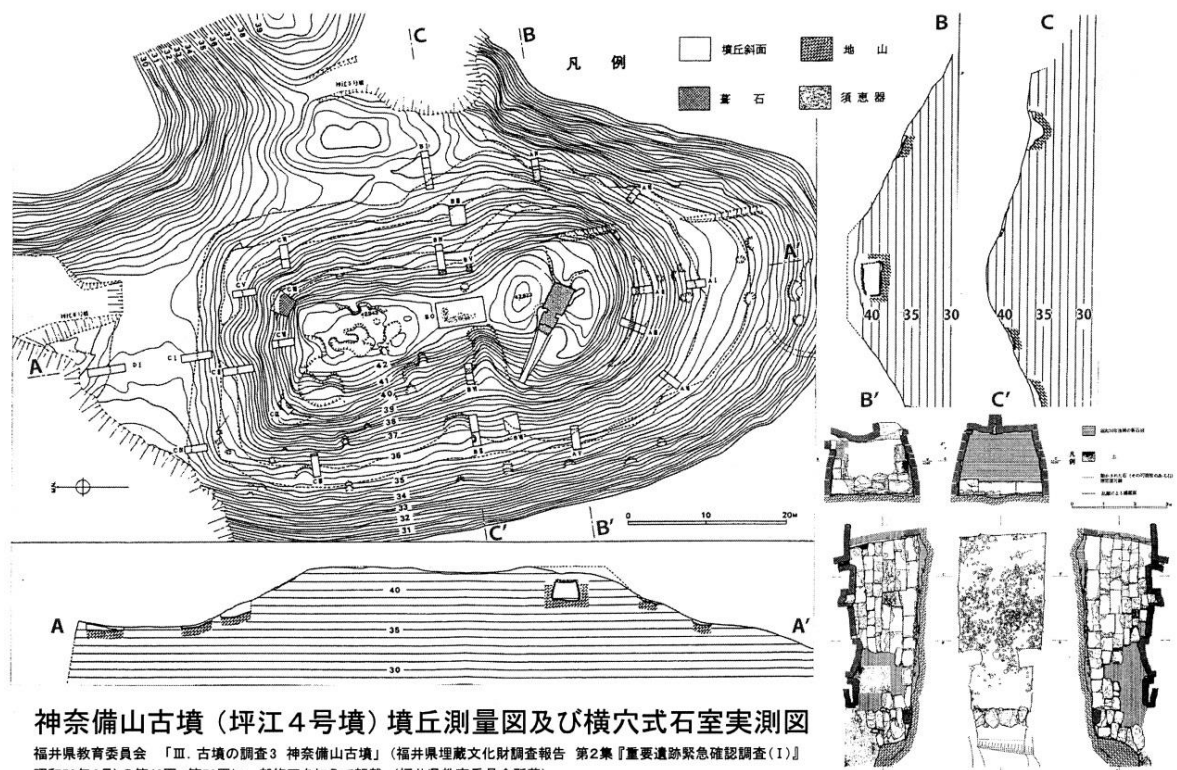


(福井県立歴史博物館画像提供)

【神奈備山古墳】

横山古墳群の坪江支群内の、あわら市瓜生地係にあり、後円部の一部は坂井市丸岡町坪江にもまたがっています。前方後円墳と確認された後、昭和 30 年に最初の調査が実施されていますが、その調査の内容は、墳丘の測量と石室の発掘、石室崩壊部分の復元でした。その後、重要遺跡緊急確認調査として福井県教育委員会によっても発掘調査が行われました。

標高約 42m の丘陵頂部に立地する前方後円墳で、前方部を北に向けています。墳丘規模は、全長 58m、後円部径 35m、同高 7.3m、前方部長 30m、同幅 25.15m、同高 6.3m を測りますが、後円部頂と前方部頂との差はほとんどありません。墳丘は 2 段築成で、円礫の葺石をもつもの埴輪は確認されていません。墳丘裾は、テラスがめぐり明瞭に確認できます。前方部の東側には陪塚ばいちょうと考えられる方墳の坪江 5 号墳が存在します。



内部構造は、切石積きりいしづみの横穴式石室で、奥壁際に石屋形があったと考えられています。また、副葬品として、鍍金銀被耳環と きんぎんひじかん1（展番 32）やガラス小玉（展番 31）などの装飾品、金銅製の鞍磯金具こんどうせい くらいそかなぐ（展番 33）などの馬具、挂甲小札けいこうこざねなどの武具、銅芯金被責金具どうしんきんひせめかなぐ（展番 30）や振り環頭かんとう及び鉄鏃てつぞくなどの武器類と多数の須恵器片（展番 15～29）を検出しています。

同じ横山古墳群内にある 6 世紀前葉の椀貸山古墳に続いて 6 世紀中葉頃に築造された、越前最後の大首長墓と考えられています。

<展示品>

・神奈備山古墳（福井県教育委員会蔵）

装身具類 2（玉類 1（展番 31）、
耳環じかん1（展番 32））

馬具片 1（鞍磯金具くらいそかなぐ1（展番 33））

武器片 2（銅芯金被責金具どうしんきんひせめかなぐ2（展番 30））

須恵器すえき 15（長頸壺ちようけいづぼ1（展番 15）、脚付長頸壺きゃくつきちようけいづぼ1（展番 17）、有蓋短頸壺ゆうがいたんけいづぼ2（展番 25、26）、子持甗こもちはそう1（展番 16）、甗はそう1（展番 22）、有蓋高坏ゆうがいたかつき2（展番 18、19）、器台きだい2（展番 20、21）、提瓶ていへい2（展番 23,24）、高坏蓋たかつきふた2（展番 27、28）、大甕おおがめ1（展番 29））



左半：神奈備山古墳出土装身具・馬具等
右半：坪江 2 号墳出土馬具類



神奈備山古墳出土須恵器

左：大甕、中：長頸壺、右：器台



神奈備山古墳出土須恵器類

会 期：1月14日（水）～3月22日（日）

開館時間：9：30～18：00（最終入館は17：30まで）

休館日：毎週月曜日、第四木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）

お問合せ：電話：0776-73-5158

e-mail maibun@city.awara.lg.jp